

ISSN 2758-9802

ちひろ美術館・東京

美術館だより

No.218

2023.6.12



ちひろ 子ども百景

●2023年6月24日(土)～10月1日(日)

いわさきちひろは、生涯一貫したテーマとして「子ども」を描き、あらゆる姿と幼心の機微を絵のなかにとらえました。やわらかな髪やふっくらとした肌、つぶらな瞳、短い手足に愛くるしい仕草……ちひろの描くあかちゃんや子どもは、いきいきと魅力にあふれています。

ちひろは、10ヵ月と1歳のあかちゃんの月齢を描き分けることができたといいます。こうした絵は、子育てのなかで息子やその友だちが遊ぶようすをスケッチし、また育児書のためのたくさんのカットを描いたなかで生み出されました。

本展では、息子をモデルにしたスケッチやさまざまに遊ぶ子どもたちを描いた作品、ちひろ自身の姿も重なる少女像、絵本『ぼちのきたうみ』などを展示するほか、『育児の百科』など、医師・松田道雄との仕事にも注目します。

母のまなざし—息子をモデルに



図1 長男・猛 1951年

「長男・猛」(図1)は、生後2ヵ月半の息子をスケッチしたものです。1951年、32歳で母親になったちひろは当時の心境を「うしおのように流れだす愛情を、どうしようもなく」と記しています。そのよろこびも束の間、仕事と育児の両立は厳しく、1ヵ月半の息子を長野県松川村の両親に預けなくてはならなくなり、お金ができると会いに行く生活が10ヵ月近く続きます。滞在中のわずかな時間に描かれたスケッチからは、わが子の姿を脳裏に焼きつけようとする切々とした思いと、深い愛情が感じられます。

翌1952年によく新居(練馬区下石神井、現ちひろ美術館・東京)での親子3人の暮らしが始まり、1956年には息子・猛をモデルにした初の絵本『ひとりのできるよ』を制作します。息子や身近な子どもたちの成長を見守りながら、優れた観察眼とデッサン力によって、あらゆる姿や動作を“そら”で描けるようになっていきました。1950年代から60年代半ばに仕事の中心だった絵雑誌の絵(図2)では、ひとりひとりの仕草を丁寧に描き分けると同時に、子どもたちをどう



図2 指人形で遊ぶ子どもたち 1966年

配置するかなど構図を工夫しています。

『育児の百科』など松田道雄との仕事

ちひろは小児科医・松田道雄の著作に数多くの挿し絵を描いています。1953年に『家族の健康』を手がけて以降、『私は赤ちゃん』『私は二歳』など育児書を中心に計11冊、描いた作品は習作を含めると700点にも及びます。核家族化が進み、社会や家庭のあり方が大きく変わるなか、新米の親に安心感を与えようと、特に母親に寄り添う松田の筆致は、あたたかくユーモアにあふれ、多くの親を励ましました。ちひろが多くの育児書の仕事を引き受けたのも、松田のそうした姿勢への共感があったのかもしれません。

1967年に出版された『育児の百科』は、誕生から就学前の子どもたちの成長過程を、月齢や年齢別にきめ細やかに解説した770頁超の大部の著作です。それぞれの発達段階に沿った描写が求められたことから、ちひろは保育園でのスケッチを重ね、月齢別のあかちゃんや幼児の体つき、仕草を的確にとらえたカット(図3・図4)107点を描きあげました。

子どもの立場に立った育児や医療、集団保育への提言など時代に先がけた内容を含む同書は、母親たちのバイブルとなり、80年に新版、87年に最新版と改訂を重ね、今も読み継がれる名著です。



図3 おもちゃとハイハイ 図4 遊ぶ子どもとあかちゃん 『育児の百科』(岩波書店)より 1967年

この仕事を契機に、成長のわずかな違いを描き分けるまでになり、あかちゃんの魅力を知り尽くしたちひろは、1970年代、水彩の微妙ななじみと濃淡による表現で、あかちゃんの秀作を数多く生み出しました(図6)。頬や指先にほどこさ



図5 海辺のひまわりと少女と小犬 1973年

れた赤味は、透き通るような肌を通して、みずみずしい生命を感じさせます。手や指の表情が豊かなことも、ちひろが描くあかちゃんの魅力のひとつです。

『ぼちのきたうみ』

『ぼちのきたうみ』は、ちひろが文も書いた至光社の絵本シリーズの最後となる6作目の絵本です。夏休みをおぼあちゃんの家で過ごす少女が、愛犬ぼちの到着を待ちわびるようすを描いています。ちひろは、夏の空と海の輝きや、少女と小犬の生命感あふれる姿を、大胆な筆づかいと鮮やかな色彩で表現しました。

「海辺のひまわりと少女と小犬」(図5)はこの絵本の習作として描かれました。夏の象徴である大輪のひまわりのむこうに、海辺を走る少女と小犬の姿がとらえられています。遠く波間に浮かぶ子どもたちの顔の表情は描き込まれてはいませんが、夏休みを謳歌する子どもたちの歓声が、今にも聞こえてきそうです。

本展ではほかにも、春の野原や緑濃い山のなかで、夏の海や牧場でと、思い思いに遊ぶ子どもたちの姿を描いた作品を紹介します。あかちゃんや幼い子どもの愛らしいカットが大集合した拡大パネルもあります。まさに子ども百景、たくさんのあかちゃんや子どもたちとの出会いをお楽しみください。(山田実穂)



図6 おつむてんてん 1971年

谷内こうた展 風のゆくえ

●2023年6月24日(土)～10月1日(日)

主催：ちひろ美術館 協力：谷内富代、至光社、平凡社、ギャラリー杉野
後援：絵本学会、(公社)全国学校図書館協議会、(一社)日本国際児童図書
評議会、日本児童図書出版協会、(公社)日本図書館協会、杉並区教育委員会、
西東京市教育委員会、練馬区

安曇野ちひろ美術館での昨年秋の展覧会に続き、ちひろ美術館・東京でも谷内こうた展を、作品を一部入れ替えて開催します。

日本とフランス

谷内こうたは、71年の人生の半分以上をヨーロッパ、主にフランスで暮らしました。今でこそ、海外に移住する日本人はめずらしくなくなりましたが、彼が初めてヨーロッパへ渡った1971年にはまだ特別なことで、当時の日本の週刊誌にグラビア記事が掲載されました。

幼いころから絵が好きで欧州への憧れを持ち、フランスで活躍した洋画家の青山義雄(1894～1996)との交流が身近にあった谷内は、やがてフランスに住み、描くようになります。一方で、彼は自分が日本人であるという意識を終生持ち続け、実際、彼は作品を日本へ送り、日本からの仕事によって生活していました。

妻・富代のことばによると、「フランスがアトリエで、日本が発表の場」であった谷内ですが、その絵本には、俳句のような省略の美とともに、彼が日々体験した欧州の乾燥した風やはっきりした光が感じられます(図1)。



図1 「のらいぬ」(至光社)より 1973年 個人蔵

イラストレーションとタブロー

本展では、谷内の絵本のための作品のみならず、初公開の初期ドイツ時代の油彩画を含めたタブローも展示します。

谷内の実家では、父親の四郎がろうけつ染めの染色工房を営んでおり、その手伝いをしていた叔父・六郎に、こうたは幼いころからかわいがられて育ちました(図2)。

「週刊新潮」の表紙絵などで活躍するようになった六郎は、後年谷内に、タブローを描く



図2 前列左、原宿の家で六郎に抱かれるこうた 右は父の四郎、中は五郎 1953年頃

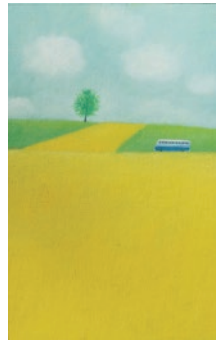


図3 北へ行くバス 1980年 個人蔵



図4 ノルマンディーの海 2003年 個人蔵

よう、強く薦めたといいます。その忠告は、多才であった六郎でさえ、イラストレーションの画家であるが故に、画家仲間から差別を受けた体験があったからでした。

タブローだけでは生きていけないと感じていた谷内は、絵本のほかにも、多くの雑誌の表紙絵などのイラストレーションを描きました。最初にヨーロッパへ渡ったときから13年間手がけた、東京ガスの広報誌「星」の表紙絵は、小さいサイズのなかにも谷内の目とらえた風景の一角が、鮮やかに切り取られています(図3)。

一方、彼が描き続けたタブローには、目の前に見える景色を、空気や温度もとらえようという丹念な筆のタッチが感じられます。時代とともに、描く対象や筆づかいが変化しながらも、イラストレーションとはまた異なる魅力を持つタブローを谷内は毎年のように日本で行う個展で発表し続け、多くのファンを魅了しました(図4)。

イラストレーションであれ、タブローであれ、自分は絵描きであるという自負があった谷内にとって、ふたつのジャンルの境界はあまり重要ではなく、次第に融合していったのかもしれませんが。

国や時代を超えて

谷内の絵本『なつのあさ』が、日本人初のポローニャ国際児童図書展のグラフィック賞受賞作となった経緯については、美術館だより216/109合併号に書きました。出版された1971年当時、テキストを限りなくそぎ落とし、絵で展開をしていく谷内独特の絵本はヨーロッパで驚きをもって迎えられました。それから、50年以上が過ぎた今、彼の絵本はフランス、そして台湾、中国などでも翻訳出版されており、その絵本の力は、時代や国を超えて伝わっています。

フランスで1971年に初めて翻訳出版された『なつのあさ』は、2017年

にタイトルを短くし、表紙絵もオリジナルと同じ場面にして、別の出版社から再び出版されています(図5・図6)。

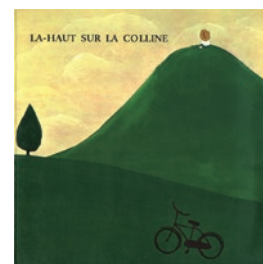


図5 フランス語版「なつのあさ」(Editions du Cerf) 1971年 表紙



図6 フランス語版「なつのあさ」(MeMo) 2017年 表紙

最後の絵本『ぼくたちのやま』

谷内の絵本デビュー当時の理解者であり、彼を支え続けた、至光社の編集者・武市八十雄と最後に組んだ絵本が、『ぼくたちのやま』です。見開きごとに、うつりゆく四季のなかにどっしりとたたずむ山と、そのふもとで遊ぶ子どもたちが描かれています(図7)。

2011年に起きた、東日本大震災の知らせをフランスで聞き、福島の人たちを谷内は案じていました。絵本のあとがきに彼が記した「自然との共生」は、谷内の日本への願いなのかもしれません。

(松方路子)



図7 『ぼくたちのやま』(至光社)より 2018年 個人蔵

企画展「没後50年 初山滋展 見果てぬ夢」関連イベント 2023年3月26日（日）講演会（オンライン）「初山滋の魅力」

初山滋研究に長年携わってきた竹迫祐子（公益財団法人いわさきひろ記念事業団理事）の講演会を、オンラインで開催しました。たくさんの画像を紹介しつつ、初山のひとと作品の魅力に迫る、あっという間の1時間半でした。（中平洋子）
絵の好きな少年

初山滋（1987-1973）は、浅草で生まれ育ちました。幼いながら息子が絵を描くのが好きなことを知っていた母親は、決して豊かではなかった家計をやりくりし、滋を近所の日本画家のもとへ通わせています。10歳で入った奉公先に着物の模様画工房を選んだのも、少しでも絵の描ける環境にと思ってのことかもしれません。初山は13歳で、三越の着物の新柄懸賞で一等を受賞するほど早熟でした。その後模様画工房を辞め、14歳で挿し絵画家・井川洗屋に弟子入り。1915年の「少女画報」にコマ絵が掲載されていますが、このあたりがデビューと思われま。ご遺族が大切に残された初山の作品は数多く、まだわかっていないこともたくさんあり、調査や研究は、現在進行形です。

画家・初山滋の誕生

初山滋の名を一躍世間に知らしめたのは、1919年に創刊された児童文芸誌「おとぎの世界」です。表紙絵、口絵、挿絵を描き、ときには物語も書きました。ちひろ美術館では、2008年に最初の初山滋展を開催して以来、4回目の展示となります。今回、残された資料のなかに、ちょうど「おとぎの世界」と同時期と思わ



左：図1 猫と兎姿の少女 1920年頃 個人蔵
右：図2 「ペコ・ボンボン」(朝日新聞社)より 1934年

れる貴重な原画（図1）が見つかりました。本展で、初公開しています。

その後、初山は「コドモノクニ」をはじめとする絵雑誌や挿し絵、装丁など子どもの本の世界で本格的に活躍、日本を代表する童画家のひとりとなります。

初山滋の線、かたち、色

初山の絵を見た多くの方が「ひとりの人が描いたとは思えない」というように、ビーズリーに似たアール・ヌーヴォー調の繊細な線もあれば、単純なフォルムを太い線でとらえたもの、また浮世絵の祖といわれる菱川師宣の簡潔でやわらかく流麗な線を思わせるものなど、初山は多彩で変幻自在な線を描いています（図2）。

そして、色にも注目してください。子どものためのよい本をつくろう、芸術性の高い仕事をしようという気運が高まる1920年代、初山も「コドモノクニ」や「コドモアサヒ」などたくさんの絵雑誌に美しい絵を残しました。いま見ても斬新なデザイン、構図、多種の画材を駆使して生み出す独特の色調で、一点一点独創的な世界を描いています。そこには日本の伝統的な装飾美や情趣が息づいています。

ちひろも幼いころ「コドモノクニ」で

初山滋の絵に出会い、「夢のようにいい気持ちになった」「初山滋の絵の夢にあこがれた」とことばを残しています。

幻の創作絵本

今回、これまではバラバラだと思っていた作品が、一冊の創作絵本だということを知り、学芸員が発見しました。未発表と思われる『えほんのあめや』（図3）です。江戸時代のあめ売りの風情を、おかめやひょっとこの絵とおどけた口上で伝えながら、戦後、甘いものなどとても口にできない子どもたちを、せめて絵本で慰めよう、という思いが込められています。一場面をのぞき、表紙から裏表紙までの原画と、初山の手による文字原稿がすべて残っていますので、いつか出版が実現することを願います。



図3 「えほんのあめや」(未発表)より 1948年 個人蔵

初山滋は自分の感性を信じて、何を表現したいかにとことんこだわり、故に戦時下には好んで国策に沿った絵を描かず、仕事が減った時期もありましたが、そのなかでも決して描くことを諦めませんでした。妥協のない芸術表現を追い続け、どこまでも画工として誇りある職人気質を貫き、画家人生を全うしました。

2023年5月18日（木）国際博物館の日 たてもの探検ツアー

5月18日は、ICOM（国際博物館会議）が定めた「国際博物館の日」です。その活動に賛同する世界中のミュージアムでさまざまな行事が開催されるこの日、ちひろ美術館・東京では、例年「たてもの探検ツアー」を開催してきました。このツアーでは、建物そのものの特徴や魅力、建築家の想い、建物とともに歩んできたちひろ美術館の歴史について、普段は入ることのできないバックヤードも含め、実際に館内をめぐりながら紹介します。今年はコロナ禍を経て4年ぶりとなる実地開催でしたが、平日にもかかわらず25名の方が参加しました。にぎやかなイベントのようすを紹介します。

多目的展示ホールからスタートしたツアーは、展示作品に背を向け、床や壁、天井に注目してもらうという、美術館の

イベントとしては少し不思議なスタートとなりました。最初に紹介したのは、建物を支える柱です。ちひろ美術館・東京は、狭い空間をできるだけ広く感じられるよう壁を最小限にし、柱がむき出しになっています。十字型の柱（熱押し出し鋼柱）は、耐久はもちろん、館内の雰囲気と合わせた意匠も優れています。さらに、木目を写し取ったコンクリート壁、年を経て深い色合いになった床材……。普段は見過ごしてしまう場所に光る職人技や、建築家・内藤廣が随所に込めた想いと工夫を紹介しました。

続いて「ちひろのアトリエ」へ。今回は特別におひとりだけアトリエのなかへ招待するサプライズも。ちひろの画机に向かい合う応接椅子に腰かけた参加者からは「ゆったりと深くすわれて、今見ても



モダンな椅子ですね。まさか本当にすわられるなんて！」と笑顔があふれました。

新緑の「ちひろの庭」をひと回りした後、いよいよバックヤードとなる3階へ。残念ながらこの日は西の空に雲がかかり、富士山は見えませんでした。上から建物を見下ろすと、4棟が並ぶ複雑な構造であることがよくわかりました。

ご来館の際には、展覧会はもちろん、多くの方の想いや工夫が込められている建物にもご注目ください。（宗像仁美）

ひとこと
ふたこと
みこと



3月24日(金)

「ひとことふたことみこと」に書いた31年前の自分に会いにやってきました。あのときに書いた、結婚をして子どもを産んで、おだやかな日を過ごす願いは叶いました。61歳になりました。ここは少しも変わっていないですね。これからまず一つ。(森直美)

3月28日(火)

久しぶりに見る美しい水彩画はおだやかにやさしい気持ちにさせてくれます。ちひろさんも家族や子どもたちを想っていたことがよく分かりました。にじんだ水彩の美しさと対照的な鉛筆の力強い線が印象に残りました。(平池暁子)

3月29日(水)

ちひろさんがあこがれていた初山滋の展覧会。ちひろさんとも重なる

生けることが輝いている絵の数々。心美しく生きることをあきらめずに生きていこうと改めて思わせてもらいました。(加寿子)

3月29日(水)

ちひろさんの絵が大好きです！ちひろさんは水さいを使っていると聞きました。だからほんわかして、色々な色がまじりあうすてきな絵ができるのですね。母によると1~2才からこの美じゅつ館に来ていたそうです。今年もたくさん、ここに来たいと思います。(小学3年生 女の子)

4月8日(土)

職場の人間関係に疲れ果て、美術館に参りました。やさしい色彩、やわらかな表情の子どもたち。頑なだった心が少し解けたような気がします。(なな)

5月6日(土)

子どもたちの母子手帳の絵がちひろさんです。初めて見たとき、こんなかわいい子がうまれてくるんだと心があたたかくなったことを覚えています。(セキネハスミ)

5月6日(土)

この春から小学校の図工の教員に。子どもたちと絵を描いていて心から思うのは、子どもたちの感性、世界の豊かさです。少しでも「子どもらしい」のびのびとした暮らしを送れることを願いながら授業をしています。(佐藤知弘)

5月21日(日)

僕自身、紙芝居をつくっているのですが、ちひろさんが絵をてがけた「お母さんの話」が出版紙芝居では一番好きです。初めて見たとき涙しました。(大谷祐人)

美術館
日記

3月18日(土) ☂

2ヵ月の冬期休館を経て、待ちに待った展示がオープン。「ちひろ光の彩」と同時開催の「没後50年初山滋展 見果てぬ夢」では、繊細でありながら大胆かつ自由な初山滋の作品とともに、懐かしさと洗練されたモダンさをあわせ持つ独特の空間が広がる。

4月25日(火) ☀

下石神井小学校4年生の図工の時間に出張、同校では久しぶりの出前授業を行った。スライドでの美術館紹介ののち、ちひろのにじみの水彩技法を体験してもらう。



5月8日(月) ☀

先日出前授業を行った下石神井小学校4年生の2クラスが来館。解説のあと館内を自由にまわる。気に入った絵をじっくり鑑賞する子。お友だちと楽しそうにことばを交わしながら絵を見る子。スタッフに積極的に質問してくる子も。休館日の館内を巡る子どもたちの姿に思わず笑みがこぼれる。

5月17日(水) ☀

NHK朝のドラマの影響か、お客さまから牧野記念庭園への行き方を尋ねられることが増えた。美術館の庭に咲く花について聞かれることも心なしか多い気がする。庭の植物のお世話をする園芸ボランティアを募集したところ、定員をはるかに超える応募があった。ちひろと同じように花を愛するやさしい心の人たちがたくさんいらっしゃることを実感し、あたたかく



今春ちひろの庭に仲間入りしたつるバラのアイスバーグ

幸せな気持ちになる。

5月18日(木) ☀

国際博物館の日。当館では特別な催しとしてたても探検ツアーを開催(詳細はP.4)。

5月21日(日) ☀ 時々 ☀

石神井氷川神社にて開催の「井のいち」に4年ぶりに参加し、ちひろの水彩技法を使っとうちわづくりのワークショップを出店。会場の境内では、音楽の演奏や朗読劇なども開催され、こもれびのなかで家族づれが思い思いに休日のひとときを楽しんでいた。

新収蔵
作品紹介⑤

この度、ちひろが半生を描いた絵本『わたしのえほん』の扉絵の原画と、この本に登場する小学校のときの先生にちひろが宛てた4枚のはがきが寄贈されました。

いわさきちひろ
『わたしのえほん』
扉の少女像と
いちばん好きな先生

『わたしのえほん』は当初、衆議院議員の夫・松本善明の人柄を知ってもらおうパンフレットとして企画されましたが、自分の作品として納得できるものをつくりたいと、ちひろが精力的に取り組んだ絵本です。1969年に少数で出版、1973年に講談社*から改訂出版され、全国的に流通していきます。

しかし改定版にはこの少女像は収録されず、ちひろの親しい知人の手に渡ったのでした。



ちひろが長谷戸小学校3年生のときの恩師に送った絵はがきには、再会のうれしさがあふれていました。

「三十何年ぶりでお目にかかれたお友達と先生達、ただ感動でパイでした。」

「静岡はあたたくてきっときれいな秋でしょうね。先生のあと



について写生にでかけた小さかったころのこと、このごろしみじみなつかしく思い出しています。」

『わたしのえほん』のなかで「いちばん好きな先生」とちひろにいわしめた「絵の好きな先生」です。

同時期にちひろの珠玉の想い出が帰ってきました。

(徳永美幸)

*『わたしのえほん』は、現在、新日本出版社から刊行されています。

●次回展示予定 2023年10月7日(土)～2024年1月14日(日)

いわさきちひろ やさしさと美しさと



いわさきちひろ ゆびきりをする子ども
1966年

「私は私の絵本のなかで、いまの日本から失われたいろいろなやさしさや、美しさを描こうと思っています。」(1972年)とちひろは語りました。それから51年。ちひろの絵や絵本に描かれた「やさしさ」や「美しさ」について考えます。

ちひろ美術館セレクション

2010→2021 日本の絵本展



植田真 『ひばりに』(アリス館)より 2021年
個人蔵

2011年の東日本大震災から始まった激動の2010年代。子どもを取りまく環境が変化する一方、画家たちは新しいテーマや表現に挑戦し、絵本を通して今を生きる子どもたちに向けたメッセージを発信し続けてきました。3年の延期を経た本展では、2010～2021年の絵本や作家を紹介します。

ちひろ美術館・東京イベント予定 各イベントのご予約・お問い合わせは、ちひろ美術館・東京イベント担当へ。

掲載内容は予告なく変更する場合があります。最新情報につきましては、公式サイトをご覧ください。お電話にてお問い合わせください。

TEL.03-3995-0612 chihiro.jp



〈谷内こうた展 関連イベント〉

●講演会 ポンジュール こうたさん！ー父と絵本の旅ー

- 日時：7月9日(日) 14:00～15:00
- 講師：谷内草(ガリマール出版社児童局)
- 定員：ちひろ美術館・東京 図書室20名、オンライン80名
- 参加費：800円(入館料別)
- 申し込み：要事前予約(公式サイト、Peatixにて6/9より受付)



●鼎談 編集者が語る 谷内こうたと絵本の魅力

- 日時：9月10日(日) 14:00～15:30
- 講師：市河紀子(フリーランス編集者)、千葉美香(借成社編集部)、柴田こずえ(フリーランス編集者)
- 定員：ちひろ美術館・東京 図書室20名、オンライン80名
- 参加費：800円(入館料別)
- 申し込み：要事前予約(公式サイト、Peatixにて8/10より受付)

〈ちひろ展 関連イベント〉

●わらべうたあそび

- 日時：7月15日(土) 11:00～11:40
- 講師：服部雅子(西東京市もぐらの会代表、ほとさん文庫主宰)
- 対象：0～2歳児と保護者
- 定員：8組16名
- 参加費：無料(入館料別)
- 申し込み：要事前予約(公式サイト、TEL.にて6/15より受付)

●松本猛ギャラリートーク

- 日時：8月6日(日) 14:00～14:30
- 講師：松本猛(ちひろ美術館 常任顧問)
- 定員：15名
- 参加費：無料(入館料別)
- 申し込み：当日受付

●ちひろ忌・アトリエトーク

- 日時：8月8日(火) 11:00～11:20 / 14:00～14:20
- 定員：各回15名
- 参加費：無料(入館料別)
- 申し込み：当日受付

●開館記念日・たてもの探検ツアー

- 日時：9月10日(日) 11:00～11:30
- 定員：15名(先着順)
- 参加費：無料(入館料別)

●敬老の日

- 日時：9月18日(月・祝) 65歳以上入館無料

●ギャラリートーク

- 日時：第1・3土曜日 14:00～14:30
- 定員：15名
- 参加費：無料(入館料別)
- 申し込み：当日受付

●絵本のじかん

- 日時：第2・4土曜日 11:00～11:30
- 定員：15名
- 参加費：無料(入館料別)
- 申し込み：当日受付
- 協力：NCBN(ねりま子どもと本ネットワーク)

〈展覧会関連書籍〉

●『谷内こうた 風のゆくえ』

- 著者：谷内こうた ○監修：ちひろ美術館 ○発行所：平凡社 ○発行日：2022年9月7日 ○価格：2420円(税込) ○体裁：B5変型版128ページ



〈他館での展覧会〉

●いわさきちひろ展 —ちひろの描いた世界と日本のおはなし—

主催 上市町・西田美術館 共催 北日本新聞社

- 会場：西田美術館(富山)
- 期間：7月22日(土)～9月3日(日)
- お問い合わせ先：TEL.076-472-4352

CONTENTS 〈展示紹介〉ちひろ 子ども百景…②/谷内こうた展 風のゆくえ…③/〈活動報告〉講演会(オンライン)「初山滋の魅力」/国際博物館の日 たてもの探検ツアー…④/ひとことふたことみこと/美術館日記/新収蔵作品紹介…⑤

美術館だより No.218 発行2023年6月12日